

広げよう！未来への渦

海から始める、島まるごと環境保全アクション



榎本 そら(えのもと そら)
兵庫県立洲本実業高等学校 2年

船越 あおい(ふなこし あおい)
兵庫県立洲本実業高等学校 2年

沖野 杏(おきの あんず)
兵庫県立洲本実業高等学校 2年

活動概要

活動の内容

私たちユネスコクラブは、地元淡路島の「海・山・暮らし」における様々な環境問題の解決を目指し、日々活動しています。今年度は、特に海の環境を守る取り組みに注力しました。11月2日に実施された海岸清掃イベント「3海峡クリーンアップ大作戦」ではスタンプラリーを企画し、楽しく清掃活動を行いました。

今後も淡路島の美しい海を守るために、小学生への出前授業やクルーズガイドによる啓発を計画しています。他校や地域企業との協力のもと、渦のように多くの人を巻き込みながら、淡路島の未来を次世代へつなごうとしています。

活動の特徴(新規性・発展性)

私たちの活動の特徴は、山・海・暮らしの課題を島全体の課題として捉え、「楽しく」人を巻き込んでいく点です。活動の例として、海岸清掃でゴミ拾い競争やスタンプラリーを実施しました。

また、放置竹林を整備し、食器や堆肥として再利用する活動も継続的に行っており、海の活動とのつながりを模索しています。

現在、出前授業やクルーズガイドを企画し、次世代に向けて美しい海を守る活動へと発展させているところです。

活動の成果

海岸清掃イベント「3海峡クリーンアップ大作戦」では、ゴミ拾い競争の「砂浜のG1グランプリ」や「スタンプラリー」を企画し、参加者みんなで楽しく清掃活動を行いました。今年度は170名が参加し、112袋のゴミを回収しました。

「鳴門海峡の渦潮あわじ島環境シンポジウム2025」では、淡路島内・国内だけでなく、海外にも「渦潮」の魅力を発信することができ、多くの方から好評をいただきました。

課題の設定と意図

世界に誇れるほどきれいな淡路島の海ですが、足元の海岸には毎年大量のゴミが漂着し、何度拾ってもまた増えるのが現実です。私たちは、この「美しい景観」と「汚れた現実」とのギャップに注目しました。そして、多くの人がそれを見過ごしてしまう現状こそが最大の課題だと感じました。

放置竹林問題や家庭ゴミ問題にも取り組んできた私たちは、海の問題とつながらないかと考え、海と山、そして暮らしを一つの「循環」として捉え直しました。

これらの問題について、より多くの人に關心を持ってもらうためには、実際に活動に参加してもらう必要があると考えました。しかし、環境を守るための活動というと、負担感が伴います。しかし、それを「楽しさ」に変えることで、より気軽に多くの人に環境問題に取り組んでもらえるのではないかと考えました。例えば、ゴミ拾いのゲーム化や竹の資源活用などのアイデアは、私たち高校生だからこそ発案できたことだと思います。

これらの取り組みをさらに発展させ、淡路島で暮らす人や訪れる人の意識を少しずつ変えていきたいです。そして100年後も愛される島の未来へつなぐことを目指しています。

課題解決のための仮説と計画

私たちはまず、海ゴミがなくなる原因の一つが「人々の無関心」だと考えました。さらに、「『ゴミ拾い＝義務・責任・使命』という固定観念がある」という仮説を立てました。この意識を変えるため、清掃活動に「楽しさ」があればハードルが下がるのではないかと考えました。そこで、海岸清掃イベント「3海峡クリーンアップ大作戦」にスタンプラリーや競技要素(「砂浜のG1グランプリ」)を導入し、子どもから大人までが「楽しみながら」参加できる仕組みを作りました。

次に、「淡路島の海と陸(山や暮らし)はつながっている」という捉え方をし、活動分野をつなげることも注目しました。活動継続中の、放置竹林を資源として活用する「Kaguyaプロジェクト」。伐採した竹をイベントでの食器として利用し、さらにその廃材をコンポスト(堆肥)化して土に還すことで、山を整備しながら海にたどり着くプラスチックやゴミを減らそうという取り組みを、循環モデルとして構築しようとしています。

さらに、地元の3校合同で、海の魅力と問題を子どもたちに伝える出前授業や渦潮クルーズガイドを計画しています。次世代の子どもたちに淡路島の海のことを深く考えてもらい、好きになってもらえるような活動にしたいと思います。

「楽しさ」と「つながり」を軸にしたこれらの計画は、私たち高校生が起点となって地域全体の意識を変え、持続可能な淡路島の未来を築く第一歩だと考えます。

活動で工夫できたこと

一番の工夫は、環境活動を「大変そう」から「楽しそう」へと転換させたことです。

まず海岸清掃イベント「3海峡クリーンアップ大作戦」では、単なる清掃活動に「遊び心」を取り入れました。チーム対抗のゴミ拾い競技「砂浜のG1グランプリ」や、ゴミ袋の数に応じた景品付きの「スタンプラリー」を導入し、子どもたちがゲーム感覚で熱中できる仕組みをつくりました。景品には実際に海岸で拾ったプラごみを用いた「海ゴミバッジ」を用意し、ゴミを美しく再利用できることをアピールしました。

山の「Kaguyaプロジェクト」では、長年手入れされていない放置竹林を「地域の魅力」に変える工夫を凝らしました。伐採した竹をただ廃棄するのではなく器に加工し、調理実習の経験を活かして竹筒茶碗蒸し「バンブータマごむしむし」や焼鳥丼「竹鶏物語」としてイベントで販売しました。節ごとに切り分けた竹を一つひとつ煮沸消毒するなど、製品としての質と安全にも徹底してこだわりました。さらに、器作りで出た竹チップはコンポストの材料として活用し、山の資源を土に還す循環モデルを目指しています。

これらの工夫により、「大変そう」から「楽しそうだから参加してみよう」という能動的な姿勢へと変え、淡路島の環境問題に無関心だった人たちや、多くの世代を巻き込む活動へと成長しつつあります。



「大作戦」を終えて



海岸清掃中

榎本 そら

一見するときれいに見える淡路島の砂浜。しかし、実際に立ってみると、波打ち際には、空き缶やプラスチックなどのゴミが散乱しています。以前の私は、この景色を見てただ「汚いな」「誰かが捨てたんだ」と、どこか他人事のように感じていました。しかし、ユネスコクラブでの活動を通じて、その認識は大きく変わりました。

その活動の一つが、「3海峡クリーンアップ大作戦」です。今年は、私が初めてイベントの司会進行を務めました。参加してくださった方々は、大変熱心にゴミを拾ってくれました。そして閉会式で見たのは、きれいになった海岸と、参加者の皆さんの晴れ晴れとした笑顔でした。苦勞して準備したスタンプラリーも、楽しんでくれる子供たちの姿を見て、「やってよかった」と心から思えました。この経験から私は、環境活動において大切なことの一つが、「楽しさ」だと学びました。義務感だけで続けるのは難しいと思います。しかし、「楽しい」「きれいになって気持ちいい」というポジティブな感情があれば、人は困難な状況でも力を貸してくれると思います。

私がユネスコクラブの活動をする中で気づいたことの一つが、すべての自然と生活がつながっているということです。例えば、私たちが家庭のキッチンで何気なくシンクに流してしまう油は、排水溝を通り、川を下り、最終的には海へと流れ着きます。それが海の環境を汚し、そこに住む魚たちを傷つけてしまいます。魚が減れば、漁業を営む方々の生活が苦しくなり、巡り巡って私たちの食卓から魚が消えてしまうかもしれません。私たちが無意識に行っているちょっとしたことが、未来の自然環境を壊すきっかけになっているかもしれません。この気づきは、私が社会とどう関わっていくべきか、その指針を決定づけるものとなりました。社会とかかわるとは、自分の目の前の利益だけでなく、目に見えないつながりに想像力を働かせ、責任を持つことなのだと思います。

ユネスコクラブには今、新しい具体的なビジョンが生まれつつあります。それは、これまで別々に行っていたプロジェクトを融合させ、淡路島全体を巻き込むという計画です。

これまで、竹林問題を扱う「Kaguyaプロジェクト」、海を守る「うずしおプロジェクト」、花を育てる「フラワープロジェクト」がそれぞれ独立していました。しかし、私たちの活動をつなげて大きなプロジェクトにしたいと思うようになりました。

そして今後、最も力を入れたいのが、美しい環境を次世代への継承することです。来年、「Love UZU 2125」として、小学生への出前授業や、高校生がガイドを務めるクルーズツアーを実施する予定です。そこで子どもたちに伝えたいのは、「この場所、この海でしか見られないすごい渦潮が、私たちの住む淡路島にあるんだ」という誇りです。身近に暮らす私たちがさえ知らなかった渦潮の価値や、海と山がつながっている不思議を、絵本やクイズを通して出前講座を通じて伝えていく。そうして知る人を増やし、淡路島の海を好きになってもらうことで、一人ひとりの意識や行動が変わり、淡路島はもっと住みやすい、持続可能な島になると信じています。

このような活動を通して、私は企画力と行動力、そして多くのパートナーと協力して道を切り開く協働の精神を大切に、社会に関わり続けていきたいです。自分の行動が誰かの笑顔につながり、その笑顔がまた新たな行動を生むという、プラスの連鎖を、淡路島から世界へ広げていきたいです。

船越 あおい

初めて「3海峡クリーンアップ大作戦」の会場を見たとき、私が目の当たりにしたのは、その美しいイメージとはかけ離れた現状でした。海岸には、想像を絶する量のゴミが散乱しており、波に流されて小さくなったプラスチック片だけでなく、本来あるはずのない大きな家電製品までも捨てられていました。こんなに大きなものが、こんなにきれいな場所にあるなんて。この衝撃は、私の中に一つの強い決意を生みました。「この大切な自然や美しい環境を、私たちの手で守らなければならない」。それが、私が淡路島の海ゴミ問題と向き合う最初のきっかけでした。

守りたいという想いを、行動に移すために、私は翌年の3海峡クリーンアップ大作戦で、企画・運営に挑戦しました。そこで私が最も大切にしたのは、環境を守るための「大切さ」と「楽しさ」を感じてもらうことです。環境問題への取り組みは、大変そうといった印象になりがちです。しかし、それでは活動は広がりません。

私たちは、大人から子供まで幅広い世代が参加できるよう、海岸清掃をゲーム形式にする企画を考えました。当日に向けて、スムーズに進行できるよう何度も練習を重ね、イベント関係者の方々と綿密な打ち合わせを行いました。不安もありましたが、本番でたくさんの方々が笑顔で協力し合いながら清掃に取り組む姿を見た時、とても嬉しく、やりがいを感じました。そして、このイベントを通して、自分たちだけではこの広い海岸を綺麗にすることはできないと感じました。そこで、社会を変えるには、一人で頑張るのではなく、多くの人に現状を知ってもらい、共感の輪を広げ、みんなで取り組んでいくことが何より重要なのだと学びました。

この活動を通じて、私には新たな目標ができました。それは、海岸清掃は、ゴミを拾うだけの活動ではないということ伝えることです。海岸清掃は、淡路島の「美しい海」、そして「渦潮」の魅力を伝えることにもつながります。海ゴミ問題と、地域の名所である渦潮は、つながっています。渦潮の素晴らしさや感動をもっと沢山の方々に知ってほしい。そして、少しでも海ゴミについての意識を持ってほしい。そう願っています。

そのための具体的な取り組みとして、私たちは今、大きなプロジェクトに挑戦しようとしています。兵庫県立三原高等学校、兵庫県立洲本高等学校の生徒さんと協力して行う「Love UZU 2125」という企画です。これは、学校の垣根を越えて高校生が連携し、「渦潮を100年後の未来(2125年)へ残そう」という想いで始まったプロジェクトです。私たち高校生が先頭に立ち、自然の大切さや、環境を守るために今自分たちに何ができるのかを発信していきます。

私にとって「よりよい人生」とは、自分自身の幸せを追求するだけでなく、未来の世代に「美しい淡路島」というバトンをつなぐ生き方です。私は未来の子どもたちにゴミで溢れかえった淡路島ではなく、自然豊かな淡路島で誇りをもって暮らして欲しいです。そのためには今から環境問題について積極的に考え、行動に移していかなければなりません。私たちだけでは叶えられない夢も、みんなが一緒に叶えられると信じて、私たちは渦のように多くの人を巻き込みながら、働きかけていこうと思います。一人ひとりの小さな意識の変化が、やがて大きな「渦」となり、100年後の淡路島の未来につながることを信じています。

沖野 杏

ふだん砂浜を歩いていると、打ち上げられた漂着ゴミ、空き缶やプラスチックがたくさん落ちているのを見つめます。拾っても拾っても、時間がたつとまた同じようにゴミが散乱しています。「なぜ、ゴミは減らないのだろう」と、毎年活動に参加するたび、疑問を感じていました。

特に解決したいと強く願ったのは、この減らない海ゴミの問題です。ゴミがなくなれば、美しい景観が戻るだけではありません。誤食や環境悪化に苦しむ海の生き物たちを救うことにもつながります。

課題解決のために私たちが最も力を入れたのが、「3海峡クリーンアップ大作戦」です。これは、海の環境保護だけでなく、鳴門海峡の渦潮を世界遺産にするという大きな目標に向けた清掃活動です。私たちは、ここに一つの工夫を加えました。それは、清掃活動をゲーム形式にするというアイデアです。

「ゴミ拾いをしましょう」と真面目に訴えるだけでは、関心のない人は振り向いてくれません。そこで私たちは、活動をスタンプラリー形式にしました。ゴミ袋を1つ集めるごとにスタンプが一つもらえます。スタンプが3つ集まれば景品がもらえるというルールです。その景品も、ただモノを渡すのではなく、海岸で集めたプラスチックゴミや貝殻を再利用して作った「海ゴミマジック」をプレゼントすることにしました。当日は170名以上の方々が参加くださり、結果として100個以上ものゴミ袋を回収することができました。砂浜で夢中になってゴミを探す子どもたちや、笑顔でスタンプカードを見せ合う家族連れを見た時、私は「やるべきこと」を「楽しいこと」に変えれば、誰でも行動できるのだと思いました。

これまでの私は、学校や地域での様々な問題に対して「ルールを守るべきだ」「意識を変えるべきだ」と、思っていました。しかし、今回の活動で学んだのは、人の心を動かすのはそういった義務感ではなく、「楽しさ」や「感動」であるということです。

私が考える社会との関わり方は、「やらなければならないこと」を、「やりたくなること」へと変換することです。

ゴミ拾いをゲームに変えたように、例えば防災ならキャンプと掛け合わせてみる、竹林問題なら食と掛け合わせてみる、というように、私たち高校生ならではの柔軟な発想で、課題解決のハードルを下げ、多くの人を巻き込んでいく。そんなふうには、クリエイティブな発想ができる人として、社会の役に立つ存在でありたいと強く思っています。

海ゴミバッジをプレゼントした時、受け取った参加者は「きれい」「どうやって作ったの？」と喜んでくれました。ネガティブなものをポジティブな価値に変えることで、相手を笑顔にできました。このとき、とても嬉しかったです。

今後は、この活動を少しずつ発展させていきたいと考えています。単発のイベントで終わらせるのではなく、例えば「海ゴミバッジ」作りを出前授業のワークショップとして定着させ、子どもたちがゴミ問題について考える入り口を増やしたいです。また、現在も活用しているSNSを活用して、「淡路島のゴミ拾いは楽しい」という情報を広め、ごみに対する意識が変わる人を増やしたいです。

海ゴミが減り、海の生き物が安心して暮らせる海を守り続けること。そしてその活動に関わる人たちが笑顔になることが実現したらいいなと思います。

私たちはこれからも、「楽しく」をモットーにして、淡路島の課題に向き合っていきます。小さなアイデアと行動が、この島の未来を明るく照らすと信じて、一歩ずつ進んでいきます。



うずしおの魅力を発信



ゴミを拾ってスタンプラリー

実践活動時の動画や成果物等

| 動画URL | 二次元コード | 添付PDF なし |
|-------|--------|----------|
| | | |
| | | |
| | | |

1. 地域探究アワードエントリー情報

| | | | | | |
|---------|---|---------|------|------|----|
| エントリー希望 | 有 | エントリー単位 | グループ | ブロック | 近畿 |
|---------|---|---------|------|------|----|

2. オリエンテーション合宿及び実践活動の基本情報

| | | | | | |
|-------------|--|--------------------|--------------------------|------------|---|
| 合宿実施先 | 国立淡路青少年交流の家 | 修了日 | 2025/2/6 | カリキュラムのタイプ | B |
| フィールドワークの内容 | | | | | |
| 実践活動期間 | 2025/4/1 ~ 2025/11/28 | | | | |
| 活動のタイプ | 発展的な活動 | | | | |
| これまでの活動について | 「環境保全」と「地域貢献」を軸に、3年前より生徒主体のプロジェクト型活動へ移行しました。放置竹林を資源化する「Kaguya」、渦潮の世界遺産登録を応援する海ゴミ清掃「うず」、生ごみを堆肥化する「フラワー」の3プロジェクトを展開。高校生の柔軟な発想で地域や他校と連携し、持続可能な島づくりに挑戦しています。 | | | | |
| 協力者 | 主な協力者 | | | 協力内容 | |
| | 所属 | 株式会社淡路島観光ホテル 代表取締役 | 3海峡クリーンアップ大作戦の運営支援 | | |
| | 氏名 | 上村 早苗 | | | |
| | 所属 | 兵庫県立洲本高等学校 | 3海峡クリーンアップ大作戦の共同運営 | | |
| | 氏名 | 社会部のみなさん | | | |
| | 所属 | 兵庫県立淡路三原高等学校 | WE LOVE UZU projectの共同運営 | | |
| | 氏名 | ボランティア同好会のみなさん | | | |
| 協力者総数 | 25名 | 協力団体数 | 3団体 | | |

3. 実践活動の記録

(1)総活動日数 全 11 日

| | | | | | |
|-----------|----|-----------|----|-------------|----|
| 事前:準備・打合せ | 7日 | 本番:メインの活動 | 2日 | 事後:ふりかえり・報告 | 2日 |
|-----------|----|-----------|----|-------------|----|

(2)活動成果の発信等

| 媒体 | 方法 | 回数 | 概要・備考 |
|-----|-------|------|-----------------|
| SNS | 自ら発信 | 3回以上 | 公式Instagramでの発信 |
| 新聞 | 取材された | 3回以上 | 地元新聞の地域欄の記事 |
| | | | |

(3)主な活動記録

| 活動日時 | 区分 | 活動場所 | 活動内容 |
|-------------|------------|------------|-------------------------------|
| 8/31 ~ 8/31 | ②実践活動本番 | 洲本市文化体育館 | 「鳴門海峡の渦潮あわじ島環境シンポジウム2025」での発表 |
| 11/2 | ②実践活動本番 | 洲本市由良・生石海岸 | 3海峡クリーンアップ大作戦の運営 |
| 4/28 | ①事前学習・打合せ等 | 兵庫県立洲本高等学校 | シンポジウム・清掃イベントの打ち合わせ |
| 5/10 | ①事前学習・打合せ等 | 南あわじ市福良 | 渦潮視察・勉強会 |
| 8/8 | ①事前学習・打合せ等 | 洲本県民局 | シンポジウムに向けた研修会 |